

信州豊南女子短期大学における ニュージーランド留学プログラム

—— 概要とその効果 ——

レパヴァー マリ
土平 泰子

1.はじめに

本学におけるニュージーランド留学プログラムは、平成6年に開始され、現在第9回生の出発準備が行われている。開始から3年が経過し、学生のデータもある程度まとまった数になってきた。そこで、このプログラムが本学の学生にいかなる影響を及ぼし、特に英語力向上の面でどの程度の効果を上げているのか、その現状を報告することにした。

第2章では、プログラムの流れ、留学先での授業内容と評価、単位互換制度とそれを可能にしているセメスター制度、そしてプログラム全体に対する学生の反応について述べる。そして第3章では、留学の効果について、留学前後で学生一人一人のTOEICのスコアデータを比較し、テスト理論と学習者要因という、主に二つの観点から分析と考察を行う。

2.ニュージーランド留学プログラムの概要

2.1.留学プログラムとは

2.1.1.プログラムの流れ

自分の語学力を向上させたいと願う者にとって、留学に対する期待は大きい。日常会話程度のスピーキング力を付けるためのみならず、異文化の中で生活しながら国際感覚を養うという目的のために海外で数週間から数カ月生活してみたいという英語学習者は非常に多く、中にはそのために会社を退職する者も少な

くない。しかし、実際に個人で留学や語学研修を行った後のスキルの向上の度合いには、ケースによってかなりのばらつきがあるように思える。その原因は学習者自身に起因する場合と、留学先のカリキュラムや生活環境などが問題となる場合とに分けられるであろう。

本学の留学プログラムは、これらの問題を考慮に入れ、実質15週間という限られた期間内で留学の効果が最大限に上がるよう、様々な検討がされ、「基本的な英語運用能力の増進と異文化体験、理解を通して、国際社会に対応できる人材の育成をめざす。」(本学学生便覧より)という目的のもとに発足されたものである。

このプログラムは1年生の場合は後期、2年生の場合は前期もしくは後期の、4カ月間(15週)をニュージーランドで過ごすというもので、対象学生は英語科の1、2年生である。参加人数の上限は現在のところ特に設定されておらず、原則的には希望する学生全員がプログラムに参加することができる。毎回平均約15名程度の参加がある。

留学先はニュージーランド南島のクライストチャーチにあるクライストチャーチ教育大学(CHRISTCHURCH COLLEGE OF EDUCATION)という国立大学で、本学学生のために特別なカリキュラムが組まれている。詳細は2.2.1で述べる。

下宿は全てクライストチャーチ市内に在住する一般家庭でのホームステイで、事前に学生のデータと本人の希望が書かれたプロフィールを先方に送り、それぞれの条件にあったステイ先が400件の中から選ばれる。留学の効果を高めるためには、一般家庭でのホームステイは重要なポイントであろう。

留学の効果については出発前と帰国後にTOEICを行い、客観的な評価をしている。TOEICについての詳細とその結果については第3章で詳述する。

2.1.2.なぜニュージーランドなのか

留学先にニュージーランドの大学が選ばれたのには様々な理由がある。例え

ば、ニュージーランドは治安が比較的良いということがあげられる。個人で留学する場合はともかくとして、大学側が主催するプログラムの場合は、海外留学に限らず、安全であることが第一条件である。また、本学のある辰野町がニュージーランドとの文化交流に熱心であることも理由の一つにあげられる。

ここでは、教育的な理由について特に言及してみたい。日本人が英語を学習する際、いわゆる「イギリス英語」¹⁾ (RP: Received Pronunciation) と「アメリカ英語」(GA: General American) のどちらをモデルにすればよいのかということがしばしば議論される。現在アメリカ合衆国が世界に及ぼす影響力は経済的にも社会的にも、また文化的にも大きく、現に日本においても特に若い世代の人々は服装、生活様式、思想的なものから言語に至るまで、驚くほどの影響を受けている。その是非についてはここでは論じないが、こうしたことを考慮に入れると、戦後からの英語教育においてGAがモデルになっていることは必然的であるともいえるし、そこになら問題は見あたらない。しかし、学習のし易さと使用範囲の広さという点からすると、少なくとも初級から中級レベルではむしろRPをモデルにした方が良いように思われる。

ニュージーランドの英語話者は19世紀以降移住してきたイギリス人の2～3世であることが多く、使用言語もイギリス寄りの英語である。また、アメリカ合衆国や英国のように移民の数が非常に多く、また地方によってアクセントが大きく異なる国と比較すると、ニュージーランドではRPに近い英語を使用する人が人口の約9割を占めていることから、学生はより均質な言語材料に触れることになる。もちろん、英語の熟達度レベルが上がるに従って、様々なアクセントの英語を理解できるようになることは必要である。しかし、初級から中級レベルの学習者が初めて留学をするような場合は、導入から学習が順調になされるために、1つのモデルに決めることが必要である(Gimson 1989)²⁾。その点ニュージーランドはそれがしやすい環境であると言っても過言ではない。

2.2.カリキュラムについて

2.2.1.クライストチャーチ教育大における「豊南プログラム」

本学のために作成されたプログラムの中でもっとも重点が置かれているのは、英語運用能力の向上と、オセアニア文化、人間関係論などの国際理解に関する科目である。

オセアニア文化や人間関係論の授業はセミナー形式で、学生が自分で調査をしたり、その内容を授業で発表、それについてディスカッションをすることにより進められる。授業内容そのものが魅力的であるばかりでなく、英語運用能力を高めることを目的とした授業は、英語の4技能に加えて文法能力や発音の向上にも配慮し、いずれもセミナー形式やワークショップ形式で学習者主体の授業が行われている。

以下に、このプログラムの模式図を示す。

Oceanic Cultures and Human Relationships

Early Maori History

Maori Culture

European History

New Zealand Economy

New Zealand in the 1990s

Love and Marriage

Family Life

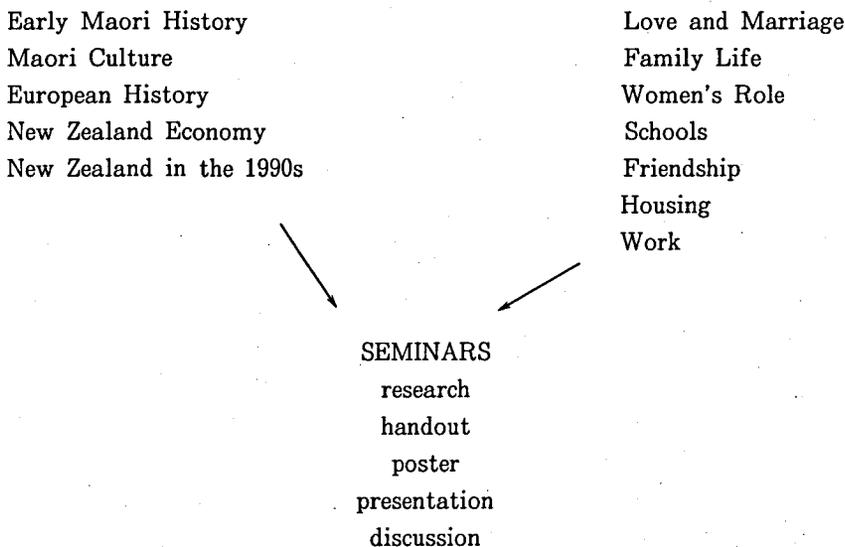
Women's Role

Schools

Friendship

Housing

Work



SEMINARS

research

handout

poster

presentation

discussion

English Language

Oral English →Homestay Language; Everyday Conversation

Pronunciation

Reading Comprehension →Seminar Topics

Creative Writing →Journals

Composition → Seminar Topics; Class Magazine

Grammar

Materials: English Course Book e.g.: Pre-Intermediate Choice

Headway Elementary

Look Ahead 2

Holiday Course Book

Holiday Course Materials

New Zealand publications: Discover New Zealand

Everyday Life in N.Z.

N.Z. Survival Kit

N.Z. English Journal

授業は午前中 (9:00~12:10) は豊南生だけで行われ、午後(1:00~3:00)は他の国の学生と一緒に行われる。留学プログラム開始当初は全ての授業を豊南生だけで行っていたが、学生の希望により、混合クラスに午後から参加することになった。

コース終了後の学生の評価については単位互換制度と併せて次の章で述べることにする。

2.2.2.文部省認定単位互換制度とセメスター制について

コース終了後、本学と単位互換可能な8科目について、10段階評価（A+～D）がされる。それらの科目と単位認定は以下の通りである。

<u>NZ</u>	<u>JAPAN</u>	<u>単位</u>
READING	English Workshop II	2
WRITING	English Composition II	2
SPEAKING	Oral English II	2
HEARING	英語発音法II	2
CREATIVE WRITING	Creative Writing	2
AREA STUDIES	オセアニア文化	2
	人間関係論	2
P.E.	スポーツ科学I	0.5
合	計	14.5

ところで、ニュージーランドでの4カ月の授業で取得した単位を本学の卒業単位に組み入れることを可能にしているのは、本学における Semester 制である。Semester 制はアメリカの大学では一般的だが、日本の大学で完全な Semester 制を採用しているところは実は数少ない。日本の大学の科目の多くは週一回、一年かけて終了するところ、Semester 制では週2回、半年で終了する。そのおかげで学生は帰国後の心配をすることなく、学習に専念できるのである。

2.2.3. 留学事前特別授業について

本学では、留学希望者に留学前の10週間、事前特別授業に参加することを義務づけている。授業は週2回、ニュージーランド人の講師により行われ、出発前にある程度の英語力とニュージーランドの文化や生活様式についての予備知識を身につけることを目的とする。ニュージーランド滞在期間の4カ月と事前特別授業2カ月分を合わせてたものを留学プログラムとしていることを考え

ば、この授業に参加することは留学の必須条件である。

実際、過去に特別授業への出席を怠った学生が留学を拒否されたことがあった。海外に行きさえすれば英語力が身に付くというわけではなく、限られた期間で最大限の効果を上げるためには、事前にある程度の語彙力と文法力を付けることが必要で、留学先は実際にそれを使用する訓練をする場であるという割り切った考えも必要であろう。基礎的な学習が不十分な状態での留学では、一見流暢さが増したように思えても、その効果は目に見えた形にはなりにくいのである。

2.3. 学生の反応

留学の効果については第3章で客観的に見るとして、ここでは、学生の反応として留学プログラムに参加した学生の感想文を取り上げたい。学生の多くが異文化での生活にはじめは苦労しつつも最終的には自分にプラスになったという感想を述べている。中でも次にあげる学生の作文からは、英語力そのものが向上したことに加えて、新しい環境で努力したことが彼女の人間的な成長を促したことが見て取れる。

私はNZでの4カ月全てもいい経験だったと心から思います。先ず自分に自信がもてたことが1番のおみやげになったと思います。初めての留学でいろいろ不安でした。4カ月過ぎて、全く何も変わっていなかったらと、いろんなことを考えていました。私は人より英語ができないので、そのことがかなり気になっていました。挨拶と自己紹介がやっと思えるぐらいの能力でNZに行ったからです。

私は、毎日ぼーっと一日が過ぎていくことだけは避けたいと思い、毎夜、遅くまで基礎から始めました。私はNZで何か挑戦したいと思っていて、speaking testを受けることにしました。そのspeaking testにパスしてから私は変わった気がします。

全て前向きに考えるようになり、自分から行動するようになりました。その結果、友達ができ、いろんな話ができるようになりました。周りに「変わった」「英語ができるようになったね」と言われたとき、そのとき私は本当に来て良かったと思いました。

NZで経験した、つらいこと、むかついたこと、楽しかったこと全てこれからプラスになると思います。NZに来たことにとって、新たに自分を見つめ直すこともできたし、全てが良かったと思います。

私は英語がこんなに楽しいと思ったことがありません。日本に帰国してから今まで以上に勉強して、そしてNZに戻ってきたいと思っています。

すばらしい経験をさせてくれた両親に感謝しています。

(第7回留学生の感想文より)

3 ニュージーランド留学とその効果

3. 1 本学でのTOEIC実施について

TOEIC(Test of English for International Communication)はアメリカの教育研究機関であるETS(Educational Testing Service)によって作成された言語能力テストである。TOEICの構成はListening100問、Reading100問から成り、時間はそれぞれ45分と75分である。Listening100問を45分間、Reading100問を75分間、計1時間30分回答し続けるというのは学生にとっては受験するだけでもかなりの体力と忍耐を必要とするようである。そしてTOEICでは、Listening, Reading共に実際に英語を母語とする人々が日常生活そしてビジネスで用いるであろうと思われるauthenticな文、文章が使われ、そしてListeningでは問題文は一度だけ、しかもnatural speedで読まれているため、通常の中学校、高等学校での英語の教育を受けてきている日本の学習者にとってはかなりの訓練が必要である。

本学ではTOEICをIP(Institutional Program)で、4月、7月、11月、2月の年に4回実施している。平成8年度においては長野オリンピックの通訳

ボランティアを念頭に置いたTOEIC勉強会を週に1回、また平成9年度の新カリキュラムより英語演習I、II(週2回、計3時間)においてTOEIC、英検対策を一年中行っているため、NZ留学をしない学生にもかなりのTOEICスコアの上昇が見られている。(e.g.,245→385, 305→390, 635→655)しかしながら、このTOEICはNZ留学の効果を見るには最も適した言語能力テストでもある。というのは、5ヶ月間の留学において学生が最も鍛えられるであろうと考えられるListeningと情報を早く読み取るscanningの能力を十分に測定できるテストだからである。特にListeningについて言えば、聴解問題が10~20問しかない従来の言語能力テストよりも100問と項目数も多いテストの方が信頼性も高くなると言われているため(池田1992)、聴解能力の伸びを測るには非常に適した言語能力テストであるといえる。

3. 2 ニュージーランド留学者のTOEICスコアの変化

3. 2. 1 スコアデータについて

5ヶ月間のニュージーランド留学を体験した学生のTOEICスコアの変遷は表1のように表される。この表は1996年10月から1997年2月までに留学した第6期NZ留学生と、1997年2月から1997年6月まで留学した第7期NZ留学生のスコアデータを比較したものである。TOEIC(IP)は先にも述べた通り年に4回を予定して行われるが、実施のための人数制限等の事情があり、全学生共通で受験しているのは毎年4月のみである。また第8期からはNZ留学直前・直後は就職等の事情も考えて全員強制的に受験させているが、第6、7期の学生については自由とし、代わりに別のテストでその実力の変化を測るようにしていた。形式等の違いから本稿においてそのデータをTOEICのデータと比較することは難しく、そのため、表1にはいくつもの空欄が認められる。そしてその結果、特に第6期の学生の殆どと第7期の学生の一部は入学時のTOEICスコアと帰国時のスコアを比べることとなってしまった。しかしながら、彼女達の大きなスコアの伸びとNZ留学が彼女たちに与えた影響の大きさ

を考えると問題無いと思われる。第8期以降は全員受験を前提としているためこのようなことはなくなり、より正確なデータが得られるのでまた分析を続けたい。

表2は、同じく第6、7期のNZ留学生のTOEICスコアのListeningとReadingの2つのセクションでの内訳を留学前と後でそれぞれ比較したものである。5ヶ月間の留学の中で学生達は留学先で主に会話の授業を受講し、ホストファミリーとのコミュニケーションの必要もあり、ReadingよりもListeningやSpeakingの能力の向上、そしてその伸びがtotalスコアの伸びに大きく貢献しているはずである。

3. 2. 2 考察

それでは表1から考察を述べていきたい。まず、目に付くのはNZ留学経験者のTOEICスコアが総じて上昇していることであろう。平成6年4月に行われた第1回TOEICにおいては、受験者全体の平均スコアは265であったのに対し、第6期NZ留学生の平均スコアは396.6(留学前は296.6)であった。この理由は、第一にはその回の受験者の半分を入学したての1年生が占めており、その1年生の殆どが今回初めてTOEICを受験したことが考えられるが、平均スコア130という大差は帰国生の実力の向上を十分に示していると考えて良いだろう。

次に目を引くのは第6、7期共に非常にスコアの伸びの大きかった学生がいることである(+110~190)。そして全体的な傾向ではあるが特に出発前のスコアで全体を上位群、下位群の2つに分けた場合、大きな伸びは下位群の生徒によく見られるということである(e.g.,st.G,H,O,P,R,T,U)。これは先ず、TOEICのように全問正解することが難しいような言語能力テストではスコアの高い者ほどさらにスコアを伸ばしていくことが困難になるからだと考えられる。これはスコア1の重みが上位と下位で異なるかのようで理論上は問題があるが、実際はよく起こることである。ある程度の実力のある学生はさらに難し

表1. 第6、7期NZ留学生のTOEICスコアの変化 (total)

		96/4	96/7	96/11	97/4	97/7	前回比
第6期 (96/10 ~97/2)	st.A	325		-	490		165+
	st.B	335	310	-	370	455	60+
	st.C	260		-	320	305	60+
	st.D	245		-	325		80+
	st.E	235		-	330		95+
	st.F	335	205	-	235		30+
	st.G	190		-	370	390	180+
	st.H	165		-	355	440	190+
第7期 (96/2 ~96/6)	st.I	215	350	465	-	470	5+
	st.J	275		440	-	365	75-
	st.K	380			-	450	70+

st.L	305			-	360	55+
st.M	295		270	-	340	70+
st.N	270			-	365	95+
st.O	230	250		-	375	125+
st.P	240			-	355	115+
st.Q	270	150	235	-	275	40+
st.R	285		235	-	350	115+
st.S	260		230	-	280	50+
st.T	225	225		-	335	110+
st.U	240	210		-	355	115+

い問題に正答しなければいけないので、そう簡単にはスコアの伸びが期待できないのである。しかしここで下位群の伸びの大きかった学生(st.G,H,P,R,T,U)を見るともう一つ面白い考察が可能である。それは彼女たちは皆NZに対して特別な気持ちを抱いており、全員が再びNZへ戻りたいと考えていることである。勿論英語力がついたから再び戻りたいのだという解釈

も成り立つが、再び戻りたいと思うほどのNZに対する愛着が、統合的動機づけ (integrative motivation; cf. Gardner and Lambert 1972) となり、英語力の向上に繋がったという考え方も出来る。統合的動機づけと英語力との相関関係が既に多くの研究で証明されていること (e.g., Gardner & Lambert 1972, 1990; Dornyei 1990; Tsuchihira 1993)、また留学前には全く学習意欲を失っていた学生O,P,Tが、帰国後は積極的に授業に参加するようになったことも合わせて考えると、NZ留学が学習者の統合的動機づけとなり英語力の向上に貢献したという解釈の方がここでは適当といえる。

しかし一方で、残念ながらスコアが低下した者もいる(st.J)。学生Jは出発前は非常に積極的で笑顔を絶やさず、TOEICスコアも275から11月には440に到達していた。しかし、NZに渡った後、長い期間のホームシックにかかってしまった。精神的に不安定になってしまったことが、言語学習効果にも大きく影響したと考えられる。この事からもまた言語学習者の統合的動機づけ、つまりtarget languageを用いる国、人、そして文化への興味・関心は言語能力と深く関わっているといえよう。

第4の考察としては、第6期NZ留学生の帰国後のTOEICスコアの上昇が挙げられる。学生B,G,Hは、帰国から5ヶ月経っているにもかかわらず1997年の7月のTOEICでそれぞれ85, 20, 85とスコアを伸ばしている。また彼女達のを指導している教員も皆彼女達の学習態度や積極性などの変化を認めている。これは、本学のNZ留学が滞在時に能力を伸ばすだけでなく、学習者の学習方策、学習態度、動機づけにも大きく作用し、帰国後も良い影響を与え続けていることを示している。

最後にTOEICの2つのsectionであるListeningとReadingのスコアを留学前と後で比較してみたい。先にも述べたように学生は留学先では会話の授業を主として受講し、ホストファミリーとのコミュニケーションの必要もあることからReadingよりもListeningを重点的に訓練していると考えられる。従って、Listening Sectionの伸びの方がReading Sectionの伸びよりも大きいと考

えられる。そこで各スコアを整理してみると（表2参照）、Listeningは伸びが-55~150、Readingは-35~55と、総じてListeningの伸びがReadingよりも大きいのが分かる。Readingのスコアが低下している者も数人いる(st.B,E,I,K,L,S)。TOEICのReading Sectionは日常生活やビジネスに必要な読解力を測るもので、本来はそれに必要なscanningや表や広告等を用いたinformation

表2. 第6、7期NZ留学生のTOEICスコアの変化

(Listening Section, Reading Section)

		Listening		Reading		Total	
第6期 (96/10 ~97/2)	st.A	210→350	140+	115→140	25+	325→490	165+
	st.B	180→275	95+	130→95	35-	310→370	60+
	st.C	165→190	35+	95→130	35+	260→320	60+
	st.D	150→195	45+	95→130	35+	245→325	80+
	st.E	130→235	105+	105→95	10-	235→330	95+
	st.F	115→135	20+	90→100	10+	205→235	30+
	st.G	125→275	150+	65→95	30+	190→370	180+
	st.H	95→215	125+	70→140	70+	165→355	190+

第7期 (96/2 ~96/6)	st.I	285→295	10+	180→175	10-	465→470	5+
	st.J	270→215	55-	120→150	30+	440→365	75-
	st.K	195→275	80+	185→175	10-	380→450	70+
	st.L	160→220	60+	145→140	5-	305→360	55+
	st.M	175→210	35+	95→130	35+	270→340	70+
	st.N	135→215	80+	135→150	15+	270→365	95+
	st.O	145→235	90+	105→140	35+	250→375	125+
	st.P	155→250	95+	85→105	20+	240→355	115+
	st.Q	135→165	30+	100→110	10+	235→275	40+
	st.R	120→180	0+	115→170	55+	235→350	115+
	st.S	115→215	100+	115→70	45-	230→280	50+
	st.T	175→235	60+	50→100	50+	225→335	110+
	st.U	150→250	100+	60→105	45+	210→355	115+

gatheringの能力は授業や日常生活を通して養われるはずである。Readingスコアのした学生が必ずしも基礎力のない学生ではないことも合わせて、考えられる理由としては、学生がNZ留学を日本では得がたいSpeakingとListeningの絶好の練習機会と考え、Readingに重きを置かなかったこと、が挙げられる。

3. 3 結論-TOEICスコアに見るNZ留学の効果

以上、第6、7期NZ留学生のTOEICスコア変化を見てきた。より正確なデータ収集、相関係数の算出、回帰分析などを本来は行うべきであるが、適切なサンプル数が得られないため本稿では留学前後のスコアの単純比較に留めた。それぞれ表1、2のように整理した結果、以下のような考察が得られた。

NZ留学の前後では

- ① TOEICスコアは総じて上昇している。
- ② スコアの伸びは下位群の方が大きい傾向にある。
- ③ 動機付け、精神面の問題からスコアの低下した学生もいる。
- ④ 統合的動機づけによりNZ留学経験者のスコアは帰国後も伸びる傾向にある。
- ⑤ ReadingよりもListening Sectionの方がスコアの伸びが大きい。

今後の研究課題としては、より多く正確なデータとサンプルの収集、NZ留学の前後でどのような項目においてスコアが伸びるのかという項目分析、統合的動機づけとスコアの相関関係、回帰分析、そして留学をしない学生との比較等が考えられる。しかしながら、この少ない事例を見ても殆どの学生において留学の前後でスコアの上昇が認められ、特にListeningにおいてはその傾向は著しいものがあった。今回のTOEICスコアの比較を通じてNZ留学の学習者の英語能力の対する効果が認められたといえる。

4. 結論

留学の効果は、TOEICのスコアの上昇に見られるばかりでなく、帰国後の

学習態度や人格形成にも大きな影響を与えていることを述べた。

今後の課題としては、留学時の学生の精神的な負担を軽くするための工夫や、TOEICのスコアとしては表れにくい効果-コミュニケーション能力や動機づけ、人格形成などを考慮に入れ、さらに充実したプログラムにするための検討を重ねる必要があるだろう。

注1. 標準的なイギリス英語発音は日本ではQueens Englishと呼ばれることが多いが、実際にはReceived Pronunciation (容認発音)とかOxford Englishなどと言うことが多い。英語を外国語として学習する場合はBBCのアナウンサーの話す英語をモデルとする場合が多いことから、また、最近では国内でも、もっとも標準的な発音であると認められていることから、BBC EnglishとかBroadcast English (放送英語) などと呼ばれることもある。

注2. Whatever abilities the learner may acquire in the later states of learning English, he will be well advised at the beginning to model his productive performance on but one type of spoken English, without any conscious attempt to alter his pronunciation according to style or situation in the way that the native speaker does, but restricting himself to what has been called a 'careful, colloquial' style. (p314, 11. 9-15)

参考文献

Dornyei, Z. (1990) 'Conceptualizing Motivation in Foreign Language Learning'. In *Language Learning*, vol.50, pp.145-78.

Gardner, R.C. and Lambert, W.E. (1972) *Attitudes and Motivation in Second Language Learning*, Newbury Publishers.

- Gardner, R.C. and Lambert, W.E. (1990) 'Attitudes, Motivation, and Personality as Predictors of Success in Foreign Language Learning'. In Parry, T.S. and Stansfield, C.W.(eds.) *Language Aptitude Reconsidered*, Englewood Cliffs, Prentice Hall Regents.
- Gimson, A.C. (1989) *An Introduction to the Pronunciation of English*, -4th ed., Edward Arnold.
- Roach, P. (1991) *English Phonetics and Phonology: A practical course*, -2nd ed., Cambridge University Press.
- 池田 央 (1992) 『テストの科学』, 日本文化科学社.
- Tsuchihira, T. (1993) 'Motivation and Personalities in Introducing Communicative English Teaching in the Japanese Context,' 『筑波英語教育』, vol.14, pp.233-250.